

「稲むらの火」の今日的意義

安政南海地震における一人の日本人の記録

●防災委員会都市部会●

柴 田 登

1. 東北地方太平洋沖地震津波の後でー 1

東北地方太平洋沖地震とその後の津波でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げますと共に、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

このレポートは、平成 22 年 1 月 20 日の第 19 回防災セミナーで配布した資料の内容の一部を表にするなどして読み易さに配慮して書き直したものです。

2. まえがき(ごりょう君)

平成 21 年度南海地震防災関連施設等研修旅行 2 日目の 11 月 13 日、熊野川沿いの国道を車で移動中、横腹に「ごりょう君」と書いた保冷車の様な車が国道脇の広場に停まっているのが目に留まった。松明をかざした丁髷姿の男の絵が見えることから、このごりょう君こそ、3 日目の見学施設「稲むらの火の館」の伝説の主人公濱口梧陵の筈で、何の車か、札幌に戻ってからインターネットで調べてみた。何と「ごりょう君」は和歌山県の地震体験車の名前だった。



写真-1 和歌山県の地震体験車「ごりょう君」
(和歌山県総合防災課のホームページから)

この様に、和歌山県民にとって津波防災と云えば馴染みの深い濱口梧陵だが、「稲むらの火の館」の展

示と資料からその功績などについて紹介する。

3. 濱口梧陵のこと

ヤマサ醤油、勝海舟、郵便局、ニューヨーク、小泉八雲、国定教科書。脈絡の無い連想ゲームのようだが、わが国最高の防災教材と言われる「稲むらの火」のモデル濱口梧陵の一生と、安政地震津波の際の功績が後世に語り継がれることに



写真-2 濱口梧陵
西太平洋地震・津波防災シンポジウム
パンフレット(平成15年3月発行)から

なった経緯に関連する一連のキーワードである。

濱口梧陵は 1820 年(文政 3 年)に広村(現在の^{ひろがわ}川町)でヤマサ醤油の創業家系の分家の長男として生まれ、12 歳で本家の養子となり、事業を継ぐ。仕事で千葉と和歌山を往き来する傍ら、同時代の人としては佐久間象山に学び、勝海舟や福沢諭吉とも親交を結ぶ。彼らとの親交を通じ海外にも眼を向ける中で、教育の大切さを感じ、1852 年(嘉永 5 年)、志を共にする人達と広村に「耐久社」という文武両道の稽古場(現在の耐久中学校)を開く。安政南海地震津波での「稲むらの火」の物語に繋がる貢献の後、1871 年(明治 4 年)に^{えきていのかみ}郵便頭(後の郵政大臣にあたると思われる)に就任、1879 年(明治 12 年)には和歌山県議会初代議長に就任するなど、公職を長く務めると共に、民主主義を広める活動にも参加している。1884 年(明治 17 年)には長年の希望であった海外の知見を広めるため、欧米視察旅行に発つが、

翌年ニューヨークで客死する。その後 1896 年(明治 29 年)に、小泉八雲が安政南海地震津波での濱口梧陵の徳行を「生き神様(A Living God)」という英文の物語で紹介する。更に 1934 年(昭和 9 年)、耐久中学校卒業の小学校教員中井常蔵が、それを基にした物語を文部省の教材公募に「燃ゆる稲むら」の題で応募し入選、1937 年(昭和 12 年)から 10 年間小学国語読本(5 年生用)に掲載される。

4. 「稲むらの火」の背景

「稲むらの火」の舞台は現在の和歌山県^{ひろがわ}の広川町で、約 90 年から 150 年間隔で、津波を伴う巨大地震の被害に繰り返し遭っている所である。



図-1 和歌山県広川町の位置(Yahoo地図から)

東海・東南海・南海地震は、関東地方から九州地方にかけて過去に度々大きな被害をもたらしている。

「稲むらの火」は 1854 年(嘉永 7 年。後に改元して安政元年)の、旧暦では 11 月 4 日と 5 日、新暦では 12 月 23 日と 24 日の安政東海地震と安政南海地震の時の出来事が題材になっている。

5. 「稲むらの火」と安政地震津波

稲むらというのは、刈り取りの後、天日で乾燥させるため、稲の束を積み重ねたものである。先ず「稲むらの火」の国定教科書に載った内容を紹介する。

村人達が秋の収穫を祝う祭の準備をしている最中に大きな地震が襲う。高台に住む庄屋の五兵衛老人は、地震の後、海の水が退いて行く様子を見て、昔から地域に言い伝えられている津波襲来の危険を感じる。祭の準備に夢中な村人に知らせて避難させる

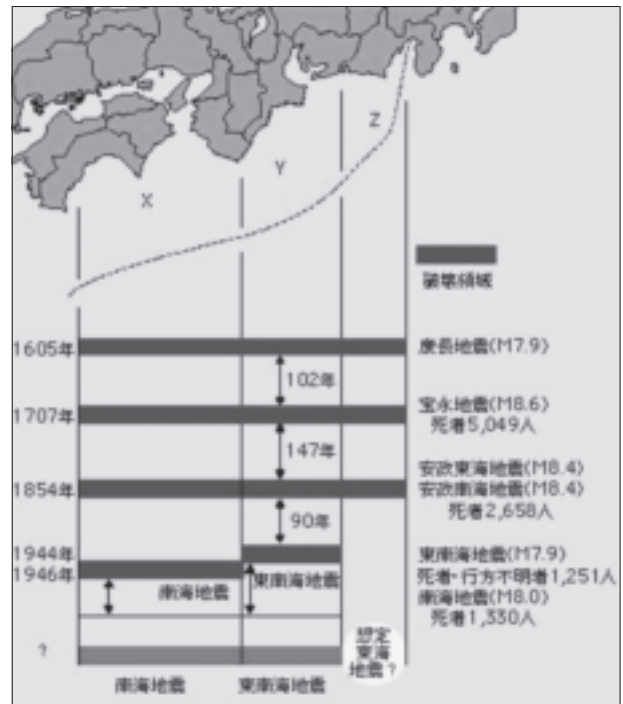


図-2 過去の東海・東南海・南海地震の経緯
(防災システム研究所のホームページ「東南海、南海地震について」の図に一部追記)

ため、五兵衛は自分の田の脱穀前の稲むらに松明で火を付ける。庄屋さんの稲むらが火事だと気付いた村人達は先を争って高台へ駆け付け、火を消そうとするが五兵衛は止める。その直後に大津波が押し寄せるが、五兵衛の犠牲的精神と機転で津波から救われた村人は漸く火事の意味が分かって五兵衛に感謝する、という物語である。

しかし、「稲むらの火」のモデルとされる安政地震の時の濱口梧陵の史実に残る働きは少し違う。

銚子との往き来の生活の中で、梧陵がたまたま広村に来ていた時、後に安政東海地震と呼ばれる大地震と津波に襲われる。その翌日の夕方、梧陵と共に高台に避難していた村人達が漸くそれぞれの家へ戻り、前日の混乱の收拾に取り掛かった時、今度は前日の比ではない激烈な地震(後に安政南海地震と呼ばれる)が村を襲う。その後、大津波が村を襲い、梧陵も波に吞まれるが辛うじて高台に難を逃れる。村は大混乱に陥っており、既に周りは夜の闇に包まれていたが、梧陵は屈強な若者 10 人程と松明を持って村に戻り、津波が何度も押し寄せる中、次々に稲むらに火を付けて安全な逃げ場所を知らせる照明と道標代わりにし、村人を安全な高台に誘導して

表－１ 「稲むらの火」の物語と史実の主な相違

項目	「稲むらの火」	史実
名前	五兵衛	濱口儀兵衛(後の梧陵)
年齢	老人	34 歳
職業	庄屋	醤油醸造業
濱口家の住居	高台	低い平地の集落
地震発生当日	村の宵祭り	収穫の終わった冬の日
村の人口	400 人	1,323 人
地震の回数	1 回	前日(東海地震)と当日(南海地震)の 2 回
地震の揺れ	長くゆったりした揺れ	激しい揺れ(南海地震)
津波の予兆	潮が引き、海底が現れた	異変の無かった海面が急激に変化
稲むらに火を放った理由	村人に津波の襲来を知らせる為	漂流者に安全な避難場所を知らせる為
津波による死者	なし	33 人

多くの命を救う。

表－１に『稲むらの火の館』のパンフレットの資料に一部追記して「稲むらの火」の物語と史実の主な相違を記す。

6. 浜口梧陵の震災後の貢献

「稲むらの火」の庄屋の五兵衛老人の話は、大津波から村人を救ったところで終わるが、その題材となった当時 34 歳の濱口梧陵の働きはそれだけでは終わらなかった。発災時からの経過を応急復旧期・復興期(本格復旧期)の段階で見ても、あらゆるところに濱口梧陵の働きがある。

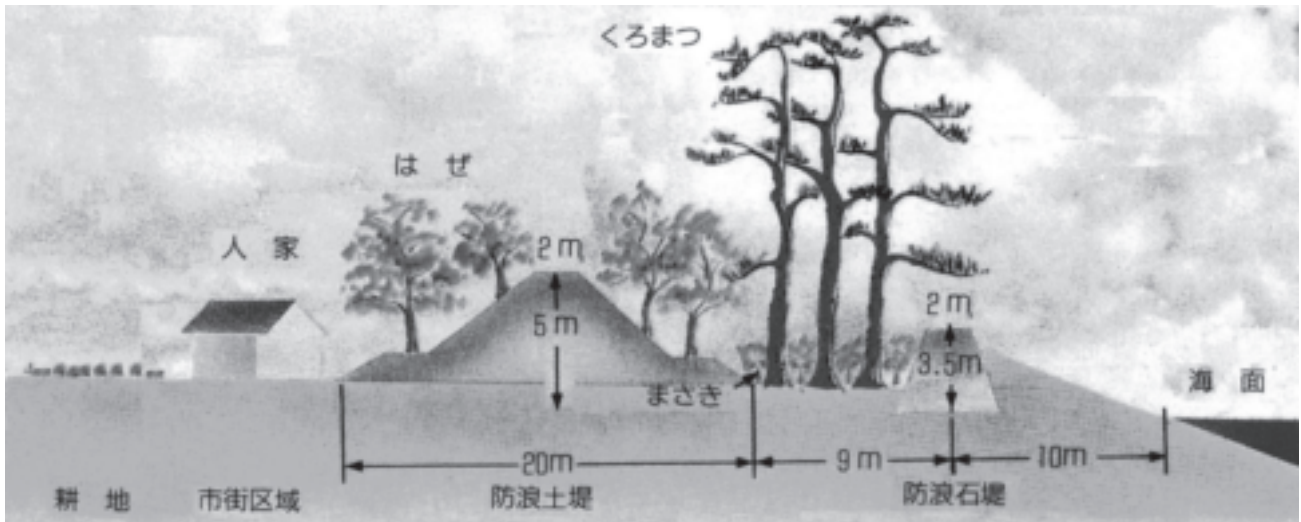
以下に発災時からの濱口梧陵の行動を、「稲むらの火の館」のパンフレットなどから時系列で追ってみる。

再び何十年か後には故郷の広村を襲うであろう津波災害から村人を守るための、高さ 5 m、幅 20 m、全長約 600 m の防潮堤を、建設費用としての銀 94 貫の殆どを私財で賄い、人夫延べ 56,736 人、3 年 10 ヶ月の歳月を費やして建設したと言われる。

安政南海地震から 92 年後となる 1946 年(昭和 21 年)には広川町を昭和南海地震が襲うが、その時の津波では、安政南海地震の浸水域と比較して防

表－２ 濱口梧陵の発災時から復興にかけての働き

	行動	内容
発災時	集団避難(前日の地震)	村人達に呼び掛け、神社や寺、高台に一日避難
	状況確認(情報収集)	二日目の激しい地震の後、若者達と村内の巡視
	津波避難誘導(二日目の地震)	急な津波の襲来に、自らも津波に巻き込まれながらも難を逃れ、若者達 10 名程と田んぼの稲むらに火を付けて廻り、村人に安全な逃げ道と避難場所を教える
応急復旧時	避難生活支援	米 200 俵を提供し、被災者の数日間の飢えを凌ぐ
	災害義援金	私財を投じると共に、近隣の資産家から寄付を募る
	被災者住宅	家屋 50 軒を建て、困窮者に無料で宿泊させる
	被災者の生活復旧支援	流出した家財、米俵の収集、農具・漁具の手当て
	災害復旧工事	被害に遭った道路や橋の補修工事を指揮
復興期	防災計画	紀州藩に大堤防(防潮堤)建設の許可を願い出る等
	防災施設建設	大堤防(防潮堤。後の広村堤)の建設を指揮
	被災者失業対策	大堤防の建設に、被災して仕事を失った村人を雇用
	防災施設建設資金拠出	大堤防建設資金の提供(銀 94 貫の殆どを私財で賄う)



広村堤防横断面図(北側から南向きに見た場合。海までの距離は埋め立て前)

図-3 広村堤防断面図(「稲むらの火と史蹟広村堤防」のパフレットより)

潮堤(広村堤)は立派にその役目を果たしたと言われている。

広川町では、1933年(昭和8年)からこの堤防前の広場で全国でも珍しい津波祭を行い、梧陵の偉業を称えと共に、毎年、参加した小学生が掌一杯の土を堤防の上に撒き均し、防災施設の維持管理の必要性和防災文化の継承に努めている。

以下に「稲むらの火と史蹟広村堤防」のパフレットより広村堤防の断面図を紹介する。

7. 今なぜ「稲むらの火」なのか？

「稲むらの火」の物語は、元々、国定教科書で防災教材として第二次大戦中の小学生に教えられたもので、濱口梧陵の功績の全てを表したものではないが、地域の地震と津波に関する言い伝えを記憶していた老人の知恵と機転、指導者としての統率力と率先行動、犠牲的精神を「稲むらの火」に象徴させることで、戦時中の国民の間に地域の団結と防災の心得として浸透を図ったものと思われる。

その「稲むらの火」が、最近、再び注目を浴びていることには二つの面があると考えられる。

一つには、いつ起きてもおかしくない大災害への緊張感がある。東海・東南海・南海地震に代表される大地震は勿論、最近の地球温暖化の影響とも言われる集中豪雨や竜巻などの自然災害が挙げられる。

二つ目には、それに対し、一刻を争う地域防災の

課題がある。群馬大学大学院片田敏孝教授の指摘する“行政依存型防災の定着”という問題や、防災文化の忘失(人間は忘れることを繰り返す動物)、地域防災活動の形骸化(組織作って活動不在)などがある。

これらの現状への対策の一つとして、或いは少なくとも対策の入口として、防災教材としての「稲むらの火」の存在があると考えられる。

「稲むらの火」の物語から読み取れることは、第二次世界大戦を含む戦時中に国定教科書の教材として採用されながら、戦後、再び取り上げられなかった、その理由に該当するものも含まれると考えられるが、以下のようなものである。全体としては防災意識と地域の助け合いの大切さである。

内容的には、次のようなことが挙げられる。

- ①命の大切さ(災害時にあっては、避難の重要性)
- ②地域指導者の統率力と犠牲的精神
- ③地域の団結と助け合い
- ④若者の率先行動
- ⑤状況に即した目的行動の選択(人生の経験を活かした知恵と機転)

- ⑥地域の防災知識や防災文化の継承

又、今回、「稲むらの火の館」を訪れて、濱口梧陵の人生や幅広い功績が積極的に紹介されているのを見て、「稲むらの火」はその人生のほんの一部に過ぎなかったことに気付かされた。

一企業家から、教育者、地域指導者、福祉事業家、

そして官吏から政治の道へ。ペリーの来航が安政地震の前年の1853年(嘉永6年)で、その後国内が開国から明治新国家建設へ大きく揺れる時代に生きた濱口梧陵は、人生の年輪を重ねるごとに公的な活動の幅を広げ、その活動域も地域から国家へ、視野は世界へと広がっていったことが分かる。

その濱口梧陵が安政地震津波の発災時から将来の災害対策まで一連の防災活動に携わった流れを教える展示は、大きな自然災害、特に地震や津波のような突発的な災害に関して、現在では多くの政策分野に亘る自助・共助・公助のプロセスを、当時、既に長期的な視野で具体化していたことを示し、「稲むらの火」の物語とは違った形で理解し易く、共感を呼ぶものがある。

そして濱口梧陵が安政地震津波の時に掲げた「稲むらの火」の松明は、私達現代人に、それぞれの地域をいつ襲うともしれない次の巨大自然災害に備えて、時代を越えて、共に防災の担い手たらんことを呼び掛けているように思える。

8. 世界へ発信する「稲むらの火」

「稲むらの火」は世界へ向けても発信されている。2003年(平成15年)3月15日から16日にかけて広川町、和歌山市、神戸市で開催された『地震・津波防災情報等に関する国際専門家会議―「西太平洋地震・津波防災シンポジウム」―』で、フィリピンとインドネシアから参加した政府機関の防災担当者や地震・津波研究者に「稲むらの火」と広村堤が紹



写真-3 西太平洋地震・津波防災シンポジウムでの
映像詩「稲むらの火」の朗読
(日本地震学界のホームページから)

介された。

その翌年の2004年(平成16年)12月26日にはインドネシア・スマトラ島沖地震が発生し、2005年(平成17年)1月にそのインド洋大津波を受けてジャカルタで開催された東南アジア諸国連合緊急首脳会議でシンガポールの首相が小泉首相に「稲むらの火」について質問をしたことが話題になった。

又、土木学会のバンダアチェ市など被災地での復旧支援活動の中で、現地の小中高生や市民向けの防災教材として「稲むらの火」が紹介されている。

9. 施設の紹介

2007年(平成19年)4月に開館した「稲むらの火の館」は「濱口梧陵記念館」と「津波防災教育センター」の2つの施設から構成され、平成21年末までの3年間で約7万3千人が訪れている。

(1) 濱口梧陵記念館

濱口家の屋敷を復元した建物で、梧陵の生い立ちから晩年までを辿る資料が展示されている。台所を復元した土間では、土間シアターとして濱口梧陵の一生を紹介するビデオの映写が行われている。



写真-4 稲むらの火の館



写真-5 土間シアター



写真-6 津波シミュレーター

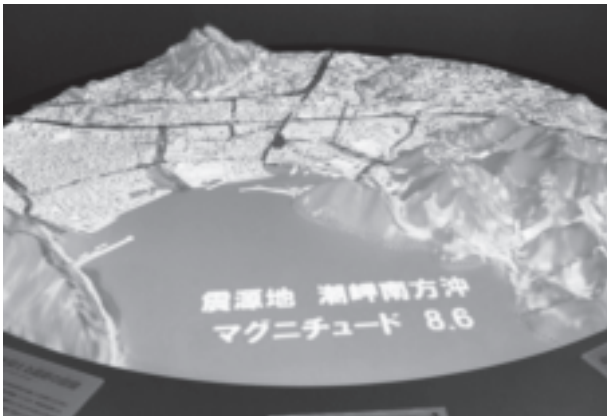


写真-7 広川町の津波浸水域シミュレーション
震源地：潮岬南方沖 想定マグニチュード：8.6

(2) 津波防災教育センター

濱口梧陵の防災精神や「稲むらの火」の人命尊重の精神を踏まえ、今後30年の間には発生の可能性が



写真-8 「継承の道」に過去の地震津波の年代表示「来たるべき東海・東南海・南海地震×××年」の先に「稲むらの火」の松明のパネルが

極めて高いとされる次の南海・東南海地震津波から大切な生命や暮らしを守ることを学ぶ施設で、1階は3D津波映像シアター、津波シミュレーション、防災体験室、2階は稲むらの火展示室、継承の道、津波ライブラリーで構成され、3階は企画展示室とガイダンスルームから成っている。見学当日は主にインドネシア・スマトラ島沖地震津波に関する展示が行われていた。

10. 東北地方太平洋沖地震津波の後で－2

1995年(平成7年)の兵庫県南部地震以来、この20年足らずの間に国内外で「想定外」を更新する大地震が続いている。観測史上ではわが国における過去最大ばかりでなく、世界的にも5番目といわれる巨大地震とそれによる津波の後では、その威力と被害の大きさを意識する時、過去の教訓的な事例を挙げても無力感に陥るだけと言われるかもしれない。

しかし、わが国の防災の考え方や意識は、先人から受け継いだ様々な災害の記憶や記録、体験の蓄積の上に築き上げられてきたもので、安政南海地震における一人の日本人の貢献の記録は、今回の巨大地震津波の後でも色褪せるものではないと考え、ここに報告するものである。

今後の復旧・復興についても、既に関東大震災後の帝都復興や第二次世界大戦後の焼け跡からの国土復興が引き合いに出されている。しかし、今回は被害の規模と特性、被災地域の広さと特徴、国内外の経済社会情勢などが複雑に絡み合うことから、被災地の新たな安心・安全と産業立地に止まらない国土デザインレベルでの復興計画の必要性が言われている。今回の大災害には誰も無関係ではられない。日本国民の良き特性とされる協調性と忍耐力、高い技術力で、力を合わせて協力していきたい。

信じよう！ 日本 ふるさと復興！

柴田 登(しばた のぼる)

技術士(建設部門)

北電総合設計 株式会社
営業部

